

浄土

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一箇一日発行
昭和二十四年四月二十八日 改題 (特別授受承認雑誌) 第三二五号
昭和四十九年十二月二十五日印刷 昭和五十年一月一日発行

第四十一卷 第一号

1975

1



書齋

爽朝

高声

乙卯二月二十日



爽朝 高声

中村 素堂

(東京神田區石神井在住・書家)

むかし筆硯のお手伝いで増上寺に泊った翌朝、はからずも道重信教法主の朝の勤行を拝むことを得た。

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ——という御法主の胸の奥から響き出てくる様な雄渾なお念仏には全く愕いてしまった。はらわたに泌みて、人々を大安心に引き込まなくては己まない気魄に恍惚とさえしていた。

元祖上人が、念仏の声につれて……仰せられてゐる深い深いものに触れた思いで、爾来口さきの声にまかせたものではないけない、この六字はあの様な信に徹した高らかな声で、泌々お唱えできたらと心がけている。

たしかに、高らかに朗らかにお十念を唱え得た朝からの一日は、明るく安らかに暮せる様である。

お十念を頂くということは有難いことである。(開宗八〇一年の一月・素堂生)

正 月 号



目

次

爽朝高声……………	中村素堂
御題「まつり」に因み ——北海道宇須善光寺参拝の記——……………	岸信宏…(2)
年頭所感	
生命を尊重する……………	大野法道…(6)
サバをとる……………	石井真峯…(8)
心のスケッチ……………	宮本文哲…(10)
—————・—————・—————	
民衆の中に生きる仏教——中国仏教圏をめぐる——……………	鎌田茂雄…(12)
卯の歳を迎える……………	今枝二郎…(16)
ご法語に聞く 法然上人の人と生活①	
念仏一辺倒の日々……………	宝田正道…(18)
ハガキでひと言『私の正月』……………	(24)
——鈴木重海・西田親正・阪入達太郎・今井捷一——	
—————・—————・—————	
法然上人霊場めぐり⑫……………	村上博了…(26)
——第23番清浄華院・第24番金戒光明寺・第25番知恩院——	
經典に聞くシリーズ⑪ 仏説無量寿経巻下<五>……………	村瀬秀雄…(32)
念仏ひじり三国志⑨ 法然上人をめぐる人々……………	寺内大吉…(37)

表紙 久住 静雄画
カット 大正大学美術部



御題「まつり」に因み

—北海道宇須善光寺参拝の記—

浄土門主 岸 信 宏

昨昭和四十九年は法然上人が念仏の信仰一つをもって、浄土宗という一宗を開かれてから、恰も八百年に相当しましたので、一宗の

法要としては、総本山知恩院に於て、四月四日から廿五日まで三週間にわたって行われたのであります。初めの一週間が慶讃大法会の中心となつたのであります。次の第二週目は宗門所屬の各種団体の大会が催されたのであります。次の第三週目は知恩院で行われる例年の御忌会が続いたのであります。

その間、全国より末寺の出勤、檀信徒の団

体、個人の参拝を合わせますと、約四十万人から五十万人の人達の参詣があつたと思われるのであります。

今年正月の御歌会初めの御題は「まつり」と仰せ出されています。「おまつり」と申しますと、神社の行事が主として思い出されるのであります。が、仏教の行事でも先祖様をおまつりすると申しますし、お盆の行事をば魂まつりとも申していますから、「まつり」と申しますことは、神社の神道の行事にも、仏教の行事にも通ずるわけであります。昨年行

われました開宗八百年の大法要等も、大いなる「おまつり」であったと申すことができません。

開宗八百年の法要は、先年来全国の末寺に於て行われているのであります。過ぐる四十七年九月の末から一ヶ月間、ハワイの浄土宗教団と北米のロザンゼルスにある浄土宗別院からの招きで、私は彼の地へ渡り、開宗八百年の法要をつとめて参ったのであります。国内の浄土宗寺院に於ても各地で行われた開宗八百年の法要に、お招きがあれば親しく赴いて、この法要をつとめたのであります。

一昨四十八年の九月七日から十八日まで、十二日間北海道へ参り、主として道南地方と呼ばれる所の七ヶ寺を巡って、開宗八百年の法要をつとめたのであります。旭川の善見寺、函館の称名寺、乙部の法然寺、江差の阿弥陀寺、森の靈鷲院、宇須の善光寺、室蘭の満開寺と八ヶ寺を廻ったのであります。その

中で、宇須の善光寺は北海道で最初に設立せられた浄土宗の寺院であることに、深い感激を覚えたのであります。

宇須の地は天然の良港で、古来より内地との交通があったのであります。寺伝によれば平安朝の初期に天台宗の慈覚大師が奥州に恐山を創立の後、蝦夷地に渡られ、この地に一光三尊の阿弥陀如来像をまつられたのが、当寺の始まりであると伝えられます。後慶長十八年に松前の藩祖慶広公が夢告によって当地に渡して、松前藩の祈願所として再興せられたと伝えられています。同藩の家老職慶季の寄進した鰐口に、寛永十五年の銘のあるものが宝物館に残されております。

後寛文六年に木彫で有名な円空上人が此の地に来られ、等身大の観音像を刻み、当寺に近い洞爺湖中の小島にこれをまつり、当寺の奥之院としたのであります。この円空上人はアイヌ人に農耕の道を教え、蝦夷地開拓の祖

と仰がれているのであります。享保元年には奥州の名僧、津輕半島の名刹今別の本覚寺貞伝上人が来寺せられ、漁民に昆布の養殖、漁網の作り方、海苔の養殖等を教えていられるのであります。享保十一年には頼阿上人が来寺せられ、一光三尊の阿弥陀仏の石像を建立せられ、現存しているのであります。安永七年には木食上人も来寺せられています。

文化元年に徳川十一代將軍家齊公が蝦夷地を幕府の直轄地とし、善光寺を再建し、十万石の禄を与えられたのであります。初代住職には増上寺より推薦の丹羽本願寺の祐普性海が、幕府より檀林格方丈の資格を与えられて就任したのであります。在住一ケ年にして遷化せられたので、二代住職として江戸誓願寺の鳳譽鸞州上人が選ばれました。

有珠地方は原住民アイヌ族の勢力地であり、善光寺の住職はアイヌ人の教化に力を注いだのであります。彼等に日本語の仮名を教

え、『後世の技折』という書物を著わして念仏の信仰を勧め、また百万遍の念珠を作って念仏を申さした時には、五百人のアイヌ人が集まって共に念仏を申したとのことであります。その百万遍の念珠が今も寺に残っています。また一枚起請文の本文にアイヌ語の言葉をつけた軸物が善光寺に残っています。また善光寺三代の念仏上人といわれた、前大本願の弁瑞上人という方は「子引歌」というのをアイヌ語で作って、彼等を教化せられています。

鸞州上人の時代には、ロシアが南進政策のため、エトロフ島等の蝦夷の各地に進出を試みたので、幕府は会津藩と仙台藩とに蝦夷の各地に出兵させ、防備に当らしめたのであります。宇須地方には仙台藩の兵士が駐在しましたので、宇須の地名も今は仙台藩主の名前を取って、伊達市宇須町となっています。

現在の住職は木立大定師で、今次戦争後樺

太から本尊様を背に負うて引き揚げて来られた方です。念仏を口にたやさない念仏の行者で、土地の信望を集めている人です。

増上寺が昨年十一月十日に本堂の落成慶讃を行ない、続いて十一月より十五日まで開宗八百年の法要を営まれたのでありますが、その記念出版に村上博了師による『増上寺史』という四七〇ページに及ぶ大冊を刊行せられて、私もその一部を頂いたのであります。その中の第十章を「北海道開拓と増上寺」と題して、宇須の善光寺の設立について詳しい記事がのせられ、初代性海上人、二代鸛州上人が幕命によって渡道せられたことや、増上寺が日高郡静内地方を支配した趣が、特に詳しく記述せられています。増上寺はその他、明治三年頃までは根室国の志古丹島、石狩国の浜益郡、箱館地区等の要所を支配し、有珠の善光寺は政府の依頼によって、有珠から札幌

郡、また有珠から室蘭までの新道の開拓まで行なっているのであります。

徳川十一代將軍家齊公の発願によって建てられた有珠の善光寺に参詣することを得た私は、蝦夷地方の開拓と教化とにつくされた歴代先徳の労苦を、深くしのんだのであります。この寺に於て宗祖法然上人の開宗八百年の法要を修し得たことは、やはり大きな一つの「まつり」の行事であつたと思います。本年御歌会初めの御題「まつり」に就て、私は次のような七絶の漢詩を作りました。

天地仁慈育此身

(天地の仁慈、此の身を育つ)

仏陀加護養吾神

(仏陀の加護、吾が神を養ふ)

謝恩祭典修来好

(謝恩の祭典、修し来って好し)

伝統美風民族醇

(伝統の美風、民族醇なり)

年 頭 所 感

生命を尊重する



大本山増上寺法主 大野 法道

生命を尊重するは生物の本能である。生きとし生きる者は、皆一様に自己を守る性能を持っている。中でも鳥獸等は外敵から逃れようとする傾向から脱することができない運命の下にある。弱肉強食の鉄則の下におかれているからである。そして人間だけは、それとは全く異った存在である。というのは、人間にあっては、この世界は生命尊重が一つの綱

目ではなくして、生きるつとめの全面課題であり、最終の目的でもあるからである。幼少からの学校、社会へ出てからの処生交際、趣味、老後の安隠など、それに一貫して取る三度の食事など、すべてが自らの生命保持を基本とするものであらねばならない。そしてその一つ一つが生命を一切にして、その本質を研く用意を怠らないように努めなければなら

ないと思う。

特に人間の生命に対する見方として肝心なのは、人々平等なることである。自らの生命尊重とともに、他も同様であるから、自他平等の立場に於て、他を尊重することにつとむべきであり、要するに万人共通の大なる生命を自覚して、そこに帰敬すべきものであると思う。

私の増上寺に於ける居室は、会館の三階にあります。見渡すところ広々として南向きであつて、日光が充分にさし込み、近い所には建物がないから、遮るものが何もなく、外を見るかぎり遠くが望めます。約四分の一キロ程度の所に都内をまわる高速道路があつて、朝早くから行きかう車の往復が走っており、その先きに浜松町と羽田を往復する電車が、かすかに恰もマッチ箱を四個ならべたように行きかう様子が見えるのであります。それで申し分ない環境だと喜んでよいと思われま

す。がしかし困ったことが一つある。というのは地面を離れて高い所を住み家とするということである。これは身体のためによくないことである。人間ならば常に土をふむことが必要である。歩くことを忘れると第一に腰や足がダメになってしまう。そうした理屈は判っている。然らばどのようにすればよいかと云えば、毎日階段を下りては上り、上つては下りたりして足腰の練習をする。そうしたことによって、歩んだと同じ結果が得られることになる。それを明日からやろうと思つているだけで、なかなか実行できずに居ります。そこで見出したことは、自然に打まかせた生活をして居ればよいと思ひ、階段を上り下りはしなくとも、室の中で隔から隔まで歩き回り、廊下をあちらからこちらへ行ったり来たりすること、所期の目的を達することができると思ふようになりました。即座にできる事柄で生きる道があると思われま



サバをとる

大本山光明寺法主 石井 真 峯

—

私の師匠（父）は、私の小学校時代食事を
するたび、お箸で少しばかりのご飯を小皿か
茶碗のフタにとって食傷を唱えて食事をする
ならわしであった。私にはその意味がわから
なかったが、ある時その説明をしてくれた。

「これはサバをとるといって、困る人にご飯
を上げて、その残りを頂くためだ」と。その
後仏教辞典を引いてみたらサバは生飯と書き
また三飯、散飯とも書き生食、衆生食ともい

う、衆生の飯、米の意であること、餓鬼、鬼子
母に供えるために、食前にとり分けた少量の
飯をいうのであることを知った。私の父は青
年時代十二年間明治の大徳行誠上人の常侍を
つとめたので自然、上人の感化により、そう
いう作法も学んだことと思う。私も食前、食
後の言葉をとなえて食事をする習慣をつけて
いるが、自分の子供にも小学校時代から食事
の言葉を教え込んだので、長女などはいい年
になったが今もそれを唱えて食事をするこ
とを忘れないようである。とにかくサバをと

り、有難く食事をするという習慣を私が早くから学びとったことはまことに感謝にたえない。

二

この頃はこの有難いという精神がうすらぎこれを口に出すことも忘れ勝ちではあるまいか。タクシ一の運転手さんをここにやり玉にあげては申し訳ない気もするが、私はタクシ一に乗る時も、金を払って降りる時も有難うということにしているが、私の挨拶に応答する運転手さんは極めて少ない。デパートというところはこういう教育をしているらしく、気持よく有難うという。

ありがとうという言葉が余り聞かれなくなったのはひとり日本ばかりでないらしい。アメリカの地下鉄の中のポスターに「もっとありがとう、ごめんなさい、すみませんということにしよう」とあったと聞いたことがある。

それについて思い出すのは、数十年前の昔話だが、アメリカ留学当時の、電話交換の言葉である。当時は多くの地方では自働式でなかったから、電話をかける時は先ずベルを鳴らす。交換手が「何番ですか、どうぞ」という。このどうぞが気持よくひびいた。こちらの番号をいうと、交換手がそれを繰り返す。するとこちらにも「そうです、マーム」と応答したものである。マームはマダム略語で、婦人に対する挨拶語、或は敬語の一種であることはご承知の通りである。今の人は今日そんなのんきなことが言っていられるものかと笑うかも知れない。しかしそれはよき時代のよき慣習であったと思わぬわけにいかない。

三

残念ながら今日は人間が乱暴になり、不親切になったような気がする。これは戦後の権利の主張を強く教える教育に責任があるので

はあるまいか。そして宗教教育ぬきの結果ではなからうか。

藤吉慈海先生の高著「法然上人法語集」の中に、あるバリの老婦人の話は、大変有難く読ませて頂いた。先生が「仏教の家」を主宰しているその有名なフランス婦人にお目にかかった折「日本では毎月何回くらいお寺に詣らなければなりませんか」と尋ねられ、先生は返事に困って「月に一回くらいでしよう」と返

事をされたら、「そんなことで仏教信者になれるすか」と反問した。そこで先生は日本の各家庭にはお仏壇があると返事をされたら、老婦人も成程という顔をされたというのである。

日本のお仏壇はほんとにすべらしいものだが、果してどれだけ朝夕参拝する人があるだろうか。日本の宗教教育は先ずお仏壇から始めるべきだと思われる。



心のスケッチ

大本山善導寺法主 宮本文哲

昭和四十九年十月十四日、大本山善導寺を会場として、浄土宗が主催となり、浄土宗全九州地区寺院、九州地方教化センター、吉水

講九州地区本部、の三団体が協賛となって、浄土宗開宗八百年記念九州地方慶讃大法要、がいとも盛大に厳修された。

あの九州一を誇る大本堂も、文字通り全く立錫の余地なく、参詣者一同の称念念仏の声は、一山をゆるがせた。老僧は、「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆえいかなとなれば、念仏は愚老一期の勸化なり。されば念仏を修せん所は、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。」の慈訓を固くかみしめて、そぞろ感涙にむせん。

老僧はこの記念すべき、開宗八百年の年を恙なく送り、ここに昭和五十年の新しき年、即ち開宗八百年の新春を迎ふるに当り、淨土一門の宗徒は、宗祖の宏恩に報ずべく層一層の努力精進が望まれて居る。

つらつら現下の世相を觀するに、昭和維新の名にふさわしく、実に奇々怪々の事のみ多く、其の政治、經濟、教育、思想、等々は勿論、其他の面に於ても、甚だしく歪曲して居ると老僧は悲觀して居る。而してこの歪曲を

是正するの道は、唯宗教的信念、特に法然上人の「吾たとへ死刑に行はるとも、この事（念仏）言わずばあるべからず。」の不惜身命のお念仏にあり、と確信するのである。

今これを端的にいえば、各人は先づ心のスイッチを切り変えるのである。するとそこには今までと変った、別の世界が現れるのである。例えば、ここに暗くて如何にも氣味の悪い部屋がありとする。こんな部屋でも、電灯のスイッチをひねれば、忽ち明るくなり氣持よい部屋となる。それと同様、煩惱忘念の暗につつまれて、迷と不安にとざされた暗い人世も、大慈大悲の御仏様に氣付いて、信心のスイッチをひねれば、迷いはさめて明るい法悦の世界が開けるのである。即ち「信は道源功德の母」であり、仏の道は是れよりぞ入る、であり、随つて社会の歪曲は自然に正されるのである。

合掌



民衆の中に生きる仏教

— 中国仏教圈をめぐる —

鎌田 茂雄

(東京大学教授)

はじめに

台湾や香港、韓国などにはどういう宗教があり、実際に民衆はどのような神さまを信仰しているのか、という実態調査を私は数年前からおこなってきたのであるが、だんだんと調べてゆくうちに、日本仏教と同じ儀礼もあれば、日本仏教とはまったくちがった習慣などがあるのに気がついた。たとえば読んでいるお経など発音はちがうが、読まれているお経は同じように漢訳されたお経であることに気がついた。いろいろと調べていると、どうも香港、台湾、韓国などの地域は一つの同じ文教文化をもっているのではないか、ということがわかってきた。韓国へ行っても仏教寺院があるし、また台湾

や香港にはたくさん中国仏教寺院があり、さらに東南アジアの華僑がすむ町にも、必らず中国の仏教の寺や、道教の廟が存在している。こう考えてみると、パーリ語の聖典を読み、南方仏教の戒律や習慣が修行しているセイロンや、ビルマ・タイなどの南方仏教とはちがった一つの中国仏教を中心とした文化圏が存在するのではないか、と思うにいたった。

中国仏教圏とは

香港や、台湾や、華僑のすんでいる東南アジアのチャイナタウンには必らず中国仏教の寺院がある。京都郊外の宇治の万福寺と同じように原色あざやかな色彩豊かな寺院はたいいてい中国仏教の寺院である。またそこでは『金剛経』や『観音

經』など日本仏教においても説誦される經典が同じように読まれてゐるし、「南無阿弥陀仏」も発音はちがうが同じように唱えられてゐる。このように漢訳經典を説誦している仏教文化圏を中国仏教文化圏という。

インドから中国へ仏教が伝わったのは後漢時代であるが、中国仏教として独自の展開をとげたのは、隋唐仏教になってからである。隋唐帝国の成立とともに、仏教は中国の周辺諸国に伝播したのである。南北朝時代の終り六世紀の始めには、朝鮮半島に伝わった。百濟へ伝わった仏教は、あまり年月がたたないうちに日本に入ったのである。奈良の田舎のたずまいや、古寺を歩いていると、ちょうど韓国の慶州の里と同じ景色が広がるのを見ていると、日本の古代仏教におよぼした朝鮮半島の仏教の影響はあまりにも大きいといわねばならない。

隋の時代になると、日本では聖徳太子が遣隋使をおくるようになり、つづいて大陸の仏教が直接、日本に伝わるようになり、日本も中国仏教圏のなかにくり入れられた。さらに唐の中頃には、現在の中国東北部の南部にあつた渤海国にも中国仏教が伝わり、大きな寺院が都につくられたのである。さらに唐の終り頃十世紀の中頃には、ヴェトナムにも中国仏教が伝わり、かくして北は渤海から朝鮮半島、日本をふくみ、

南はヴェトナムに至る地域に中国仏教圏が成立したのであつた。

中国が拝む神さま

中国人は一般に現実的だといわれるが、宗教においても現世利益の追求を願うことが強い。中国人は福祿寿という人生の三大幸福をねがう。福とは家が発展するために子供があること、禄とは財産、富を有すること、寿とは長生きのことである。この三つが人間の幸福の三大条件になるので、宗教信仰において、この三つをねがうことがお参りやお祈りの対象となる。

台湾の仏教寺院には純粹な仏教寺院もあるが、道教や民間信仰と混淆した寺院もある。台北市で有名な竜山寺は、東京でいえば浅草の観音さまと同じく庶民信仰でにぎわっている寺である。竜山寺の周辺には庶民の欲望をかなえてくれるあらゆる種類の店がところせましとならんで、庶民のエネルギーを散逸させている。この竜山寺の仏さまをみると、観音さまばかりでなく、道教の神さまが一緒にまつてあるのにびっくりする。一般庶民にとって観音さまは仏教のボサツではなく、実は道教の神さまとして意識されているのである。そこには道教とか仏教とかいう区別の意識はまったくない。中

国人が拝むありとあらゆる神さまが祭られている。台湾独特な神さまとしては有応公という神さまがある。有応公とはどんな神さまかという「有求必応」すなわち求めるものがある時、有応公にお願いすると、必ず応じてくれる、願いをかなえてくれるというまことに現実的な神さまである。庶民にとって宗教とは、どこまでも現世利益でなければならぬ。病気がなおるとか、商売が繁昌するとかという現世利益がなければ神さまを拝まないのが普通である。民間信仰のなかでもっとも重要な役割をはたす廟の成立を考えてみて、ある小さな廟の神さまを拝んだらば、御利益があったといわれると、たちまち小さな廟が大きな立派な廟に変貌してゆくのである。台北の郊外に指南宮という大きな道教の本山があるが、ここでは一晩とすると夢告があつて、夢のなかに神さまがあらわれて、信者に御告げがあるという。そして大へんにそれがよくあたるために、大きな伽藍がつぎつぎにたっている。ちなみにこの指南宮では、道教の本山であるにもかかわらず、『金剛経』など仏教の經典も読んでいる。そうすると『金剛経』は仏教の經典ではなく、道教の經典とみなし得るのである。このように民衆レベルで考えると、道教と仏教はまったく一つに融合して民衆の宗教を形成していることがわかるであらう。

台湾仏教の法会

台湾仏教では日常的な朝晩課誦などとは別にさまざまな法会がいとなまれている。一般の人々が参加する法会には阿弥陀仏や観音菩薩の誕生日をはじめ、日本の施餓鬼にあたる餓口施食や、そのほか拜天公、念仏法会など多くの仏事が現におこなわれている。餓口は瑜伽餓口といわれるもので、三時間以上もかかる法会である。五人、七人、九人というような人数でおこなわれるもので、祭壇をもうけ、それぞれの僧侶が金剛上師といわれる導師を中心として半円形に位置する。これは祖先を功養したり、死者に施物を与えるためにおこなわれるもので、もっとも普通におこなわれる法会の一つといつてよい。法会の終り頃になると、もち、菓子、小錢などをばらまき、集まつてきた子供たちが、それをあらそつて拾いあげている。餓口を説誦する時には、山海の珍味を卓上にかざっている。その御馳走のなかには、日本仏教では想像することができないような猪（豚）が功養されている。わたくしは豚の肝臓でつくった兔のそなえられているのを見たことがある。とにかく仏事というと大へんな御馳走がそなえられ、とても日本でおこなわれている法事のときの御馳走とは比較にならないほど量が多い。台中郊外の南投県碧山岩で

おこなわれた「拜天公」という仏事をかつて見たことがあるが、この時には、肉類はまったくあげられておらず、全部精進料理であった。果物、菓子、竜眼、あめなどが沢山に祭壇のうえにかざられていた。この拜天という仏事は帝釈天の誕生日をお祝いするための法会である。このような仏事に共通的にいえることは、仏事が終わったあと、必ず「紙銭」という紙でできたお金を炉で燃くことである。これをするのは僧侶ではなく、必ずおまいりにきた在家の信者である。紙銭というのは地獄で用いるお金であり、このお金を持たないと死者は地獄の刑罰からのがれることができないのである。

観音信仰の流行

仏教の信仰の対象となる仏やボサツのなかで、もともと普通に拝まれるのは、観音ボサツである。観音ボサツは即時に願いを聞いてくれるので一番信仰されるのだと思う。香港で調査した時、ある坊さんに観音信仰の核心はどこですか、と聞いたたら、ただちに観音経の冒頭にある「一心称名」の箇所を指摘された。「南無観世音ボサツ」と一心に御名を称えれば、目に見えない観音さまが現実化して、われわれを救ってくれるのであるという。観音ボサツを祭つてある寺や廟は多いが、観音亭とか観音堂と名づけられた小さな寺も数多く見

られる。また観音さまは航海安全の神さまのようにも思われ、その場合は慈航観音と呼ばれている。香港や台湾の土産品のなかにも木彫の観音さまが多く見られるし、ヒスイでできた驚くほど高価な観音さまも見られる。数年前、香港で偶然に見た映画には、悪玉と善玉がヒスイの観音像の争奪をめぐる争う場面が展開したのである。庶民のなかに生きている観音さまのすがたをみる思いがした。

おわりに

中国仏教圏において民衆のなかに生きる仏教は、現世利益を主としたもので、しかも道教信仰と融合したものであるといえよう。知識階級においては、坐禅法や念仏会などへの参加もあるが、一般庶民は現世利益を中心とする信仰であり、仏教の教義とはまったく関係のないところにおいて宗教生活をおこなっているのである。さらにいえば迷信や、シャーマニズムなどとも結合している信仰に強い魅力を感じているように思われる。

韓国において純粋な仏教信仰をめざす曹溪宗のような立派な宗派もあるが、ムードンというシャーマンと結びついて庶民の信仰をひきつけたり、占いをしている寺院もあると聞く。仏教も民間信仰のレベルにおいては、必然的にシャーマニズムと結合するにいたる一つの例をそこに見るのである。



卯の歳を迎える

今 枝 一 郎

(大正大学講師)

暦の干支について関心をもっている人はかなり多いが、十二支の動物が実は後世付会されたもので、元来は方位の区分であったということを知っている人は少いようである。

殷王朝時代に暦が用いられていたことは明らかで、それが後世次第に改定されて、今日、我が国でも民間に普くとりいれられている、干支を年月日時の記号とした暦になったのである。

中国古代に、陰陽五行説が形成されると、暦法にも当然その影響が現れ、従来の順序記号に思想的意味づけが生じると、方位記号としての十二支についても、吉凶禍福の意義が派生するようになった。それはあたかも、天空に輝く星を動物や神々の姿に見たてたように、十二支のそれぞれに動物があてられることになった。現在では、日の干支よりむしろ年

の干支の方が生活に反映しており、その年がどの干支にあたるかによって、神秘的色彩を考へることが多くなっている。

昭和四十九年は寅年で、寅に関する様々の話題が提供されたが、昭和五十年は卯つまり兎年になっているので、兎についての話題があれこれ出てくることであろう。

兎を吉とするか凶とするかは説の分かれるところであって、晋の葛洪の『抱朴子』対俗篇には、長寿の動物として記され、他にも瑞兆として記されている例がある反面、好ましくない立場で兎の登場しているものも少くない。

瑞兆としては、梁の簡文帝の『上白兎表』(『漢魏六朝百三名家集』所収)や、北周の庾信の『齊王進白兎表』(同上)などがあげられる。『延喜式』の場合は赤兎を上瑞とし、白兎を中瑞としているのが面白い。

兎を好ましく思わないのは、子を産むときの話に奇異な伝説があるからで、『博物誌』巻二に、「兎毫も甜めて月を望んで孕み、口中より子を吐く。」とあり、『論衡』巻三にもこの話があり、また吐き出す母親の口は欠唇つまりみつぐちで、他の動物が九穴を有する九竅であるのに対して、八竅であるとしている文献が和漢にまたがって多い。

兎の吉凶は、文献に徴する限りいずれにも解釈できるといふことになる。

ところで、月を望んで孕むということから月と兎との関連はどうなっているかという関心が生じるであろう。月と兎とは懷妊の縁ばかりでなく、むしろ月中の兎という話題の方が、子供でも知っている伝説として想起される。『和漢三才図会』には、月中の樹下の白に棒で搗いている絵が載っている。月と兎を考察した論考には、石上善応先生の『大正大学学報』第二号に掲載されたものがあって、印度の説話にも及ぶ論文や經典が紹介されている。したがって、ここには石上先生が触れられなかったものを紹介する意味で記したい。

月中で餅を搗く話は誰でも知っているが、実は中国では薬を搗いている。詩仙李白の詩を引いてみよう。

青天に月ありてこのかた幾時ぞ
我今盃を停めて一たび月に問ふ

人明月に攀づるは得べからず

月光却って人と相隨ふ

皎として飛鏡の丹闕に臨むがごとく

緑煙滅し尽くして清輝発す

ただ見る宵に海上より来たるを

いづくんぞ知らん曉に雲間に向かひて歿するを

白兎薬を搗く秋また春

嫦娥孤栖す誰と共にか鄰せん

(酒を把りて月に問ふ)

薬を搗くというのは、晋の傅玄の文にも見られるが、先にあげた『抱朴子』から推測してみると長寿とのかかわりが考えられ、薬はまさに仙薬ではなからうかと思うのである。

仲秋の明月に月餅を食べるのも、お餅としてよりは月餅に寄せる薬の要素が多分に包含されているのではなからうか。兎にまつわる伝説は余りに多く、とても浅学の身の能くするところではない。しかし、兎の伝説を調べてみると、兎や月を通して古代の人たちがさまざまな空想や夢を自由に心の中に描き出していたことが知られる。『太平御覧』巻九百七に引く『典略』に、「兎は明月の精」(兎者明月之精)とあるが、神秘的な美を兎や月に求めている方が私にはよき時代のように思えるのである。



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活 (一)

念仏一辺倒の日々

宝田正道

はじめに

宗祖法然上人の法語には、漢語のものと和語のものとあり、文永十一、二年の頃、三条派祖道光(望西楼了惠)が集録した『黒谷上人語燈録』全十八巻に主として収められている。宗祖滅後六十年余を経た時代で、まだ日蓮や一遍や三祖良忠らが生きていて布教に努めていた頃であるが、道光はこれらの語録をもって「是れ実に行者の心行を照すの大明燈なり」(漢語燈録序)としたもので、

普通『漢語燈録』および『和語燈録』と呼ばれている。『漢語燈録』は十巻十七章、同拾遺一卷三章を加えて十一巻二十章あり、『和語燈録』は五巻二十四章、同拾遺二巻八章を合せて七巻三十二章から成っている。前者は大経釈に始る、主として浄土の教義を説いたもので、後者には一枚起請文ほか、主として消息、書翰、問答などが収められている。両者いずれも宗祖の行実や思想、宗教を語る金言集であって、いやしくも法然上人像を知る上には欠くべからざるものであるが、特にその人と生活

の面を浮彫りにしてくれる材料は、どちらかというと後者すなわち『和語燈録』に多いようである。それに、編者も言っているように、「やまと言葉は、その文見やすくその意さとりやすし」(『和語燈録序』)である。

そこで私は、『和語燈録』に収められた法語を中心として、これから一年間、毎月、宗祖の生き方を見つめて行ってみたいと思う。もちろん、法語はこのほか、『勅修御伝』その他の諸伝記や、『一言芳談』『西方指南鈔』などにも多く散見するところであるので、必要に応じてそれらをも参考にしながらか、読者とともにその真髓を味わい、日常の生活態度や心得などを学んで行きたい、と考えるのである。

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし。(諸人勸化の御詞——『念仏問答集』)

たとひ余事をいとなむとも、念仏を申し申しこれをすると思ひをなせ。余事をしし、念仏

すとは思ふべからず。

(常に仰せられる御詞——『一言芳談』)

まず最初に、法然上人の世渡りの基調というか、処世術の根本というか、その生活態度全般について考えてみたい。それには、この二つの法語が、最もよく上人の日常規範を示している、といえよう。つまり、一切が念仏一辺倒ということである。

上人の教義は、よく一本の扇子に譬えられて、「開けば三部経、畳めば選択集、要は一枚起請文」といわれるが、これをさらにつづめれば、「ただ往生極楽のために(中略)ただ一向に念仏すべし」(一枚起請文)の二つの「ただ」に要約される。これをもっと凝縮すれば、「先」という漢字一字になるとも考えられる。すなわち、その主著『選択本願念仏集』の冒頭に掲げられた「往生之業念仏為先」の「先」である。「先」は、いうまでもなく、一番前とか先頭とか優先という意味で、他のものすべてに先駆けてということである。いわゆる「選択」の原理でいえば、「聖道門を開き」「雑行を抛ち」「助業を傍にす」ることであり、日蓮の指摘による「捨閑閑抛」の立

場を示したものである。つまり、一切の余行をかえりみず、ただ本願念仏一本を「先」取りすることに意味がある。

これは、しかし、八万四千の法門の中から「先」に念仏だけをとる、という宗乘的意義ばかりではなく、法然上人の場合は、日常生活のすべてに先んじて、まず、優先的に念仏することを提唱されたのである。だから、生活の主体は「念仏の申されん様」にしなければならぬ。念仏の邪魔になることは一切二の次にすべし、というのである。上人はその具体的な例として、いろいろな場合を示しておられる。

ひじり、つまり一人暮らしの隠遁者となつて念仏申すことが困難な者は、妻帯して家庭をもつたうえで念仏したらよい。それが不可能な者はひじりの身になつて申せばよい。家を一軒もつぼうが念仏しやすければそうすればよいし、それがだめなら流行、つまり放浪生活をして樹下石上の随所で申すのもよい。自分一人の力で申せないようだったら他人のたすけを得て念仏すればよい。一人で恥ずかしかったり心弱かったりするならば、大勢の仲間と一緒に申せばよいので、形式は何ということ

なく、きわめて自由なのである。要はどんな形でもよいから、念仏の申せる環境をつくつて、とにかく念仏相續できるように工夫せよ、といわれているのである。それは、あくまで念仏を主体においた生活様式である。

だから、何をしてもまず念仏、ということは、法然上人にとって文字どおり暮らしのモットーそのものであった。たとえ他にどんな仕事をしているときでも、念仏を申すことが先決であり、念仏を唱えながら余事をいとなむ、というのが一貫した上人の生活信条であつた。

上人は、はたして一日をどう過ごしていられたであらうか。

源空は、大唐の善導和尚のをしへにしたがひ、本朝の恵心の先徳のすすめにまかせて、称名念仏のつとめ長日六万遍也。死期やうやくちかづくによつて、又一万遍をくはへて長日七万遍の行者なり。

（聖光房に示されける御詞——『徹選撰集』『決答疑問抄』）

この法語に現れるかぎり、上人の主眼は「長日六万遍ないし七万遍の行者」ということである。長日というのは平生という意味であるから、一日中と考えてよからう。しかし、一口に一日六万遍の念仏を申すといっても、計算してみると大変な量と行である。

一体、念仏を唱えるのに要する時間はどれくらいであるか。唱え方にもよるが、普通の早さで唱えれば、一分間に六、七十遍、一時間相続すれば、三千六百ないし四千遍余りが標準となる。かりに一時間四千遍とすると、六万遍唱えるには十五時間かかる勘定である。七万遍では十七時間余りである。ある人の計算によると六万遍は十八時間だという説もあるが、いずれにせよ、相当な長時間であることに変わりはない。一日は二十四時間しかないから、単純な算術計算でいくと、残り時間は六ないし九時間しかないことになる。

いま、中間をとって、法然上人が念仏相続に費やされた時間を十七時間とし、残りを七時間と固定したらどうなるか。この七時間のうちに、睡眠と食事もとり、あまつさえ読者や著述や法話、その他来客の相手もしなければならぬことになる。便所へも立たなければならぬ

だろう。もっともこれら日常生活の中には、今の「ながら族」同様、念仏を唱えながらできる仕事もいくつがある。たとえば、手紙を書くとか用を足すとかがその例である。先にあげた法語「たとひ余事をいとむとも、念仏を申し申しこれをするとおもひをなせ」というお言葉がここで生きてくる。上人は他人に指示されるだけでなく、自ら率先してこれを実行せられていたのである。すると、口を使う食事のときはどうするか。それには次の法語が答えてくれる。

人の命は食事の時、むせて死する事も有なり。
南無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏と
のみ入るべきなり。

（常に仰せられける御詞——『勅伝』二十一）

人の命というものは、老少不定であっていつ死の縁に襲われるかわからない。食事をしている最中に、ものごのどにつかえて窒息死することだってある。正月に餅などがのどにつまんで死ぬ老人も少くないが、まことにはかなく、あつけないものである。だから、「南無阿弥陀

仏」と嚙んで「南無阿弥陀仏」と吞込むべきである、と
いうのが、この法語の趣旨である。

私は最初、このお言葉は、念仏相続を勧めるための単なる譬喩かとばかり思っていたが、よく考えてみると、これは法然上人自身の体験が生んだ貴重なおさとしであって、上人はみずからこれを実践しておられたらしい。つまり、ものを食べる時間さえ惜んで、念仏を申しとおられたのである。まるで今の「ながら族」の大先輩である。ただ違うのは、新聞を読みながら、テレビを見ながら、あるいはラジオを聞きながら飲んだり食べたりする現代人と比べて、口に念仏を唱えることが主体であったろうから、さぞやりにくかったことだろうと思う。しかし、とにかく上人は、一日の時間の配分を考え、念仏しながら食事のできる方法を実証されたわけであるから、その点でも先駆者である。

しかし、睡眠ばかりはどうしようもない。寝入る前、つまり眠りに陥るまでは口も動くから念仏も唱えられるが、一たん眠ってしまったら、寝言以外に念仏申すことはない。第一、多少とも睡眠だけはとらないと身体がまわってしまふし、いくらながら芸当のできる上人だって

睡眠を犠牲にしてまで念仏せよ、とは仰せられていない。こんな話が伝わっている。

鎌倉初期の武將で、源頼朝の下に石橋山に戦ってこれてを救い、また義仲討伐にあたっては宇治川の先陣を承ったと伝えられている佐々木四郎高綱という人がいる。彼が通世して高野山におり、たまたま京へ上った際、法然上人を訪ねて「念仏のときねむりにおかされて行を怠り侍ること、いかがしてこの障りを止めなんや」ときいたところ、上人は「目の覚めたらんほど、念仏したまへ」と答えられた、という話である（和論語）。

この話から考えると、上人も七時間のうち何時間かは必ず睡眠にあてられていたことは確かである。しかし、読書や法話など他の用事に要する時間から考えると、多分それは二、三時間の、ごく短い間だったに違いない。もし上人が、われわれ普通の人間のように、七時も八時間も寝る習慣のついた人だったら、他の用事は一つできずじまいに一日を終った勘定になるからである。

昔から、一日二、三時間しか眠らなかった偉人は沢山ある。ナポレオンやアインシュタインがそうであった、といわれている。今日でも、たとえば特殊な「虹」で関

東大震災やチリ地震を予知したという椋平某老人のごとき、毎日二時間しか眠らないで平気なそうである。

それはともかく、法然上人が「長日六万遍」の「行者」になられたということは、とりもなおさず、上述のように、念仏相続を主体として一日の大半を送り、眠る間も含めてわずか数時間を読書その他の用務にあてるといふきわめて充実した、きびしい生活をされていたというように観察できるのである。だからみずから「行者」といっておられるのもうなずける。「行者」というのは、苦しい行に耐えて道を修する人、という意味であるから、この長時間にわたる念仏相続が、苦しくない修行であるといったら嘘になるだろう。相当な強い信念がないとできるものではない。先年亡くなられた浄土宗の高僧の一人阿川貫達老和尚は、宗祖にあやかって一日六万遍の念仏を発願せられたが、近代生活ではどんなに励んでも邪魔の入ることが多く、結局四万五千遍どまりであったことを、さかんに嘆いておられた。ことほど左様に、六万遍の日課念仏は、まことに難事というべきである。

日課念仏六万遍といえ、普光親智国師（源譽存応）

らに導かれて、晩年特に熱心な浄土宗の外護者となり念仏信者となった徳川家康も、「秀忠夫人に賜う書」に、「近年日課を六万遍あて唱え候事、老人のいらぬ過役に候へ、数へらし候様に皆々申聞候」云々と述べている。六万遍の念仏が、彼にとっても大変な重荷であったことがわかる。それでも彼は念仏を日々の稽古事のように考え、「毎日朝起きいたし、夜もはやくは休み申さず、怠らぬように心がけ候」（東照宮御消息）といつて、六万遍念仏に励んだのである。彼もやはり早起き遅寝で、睡眠時間二、三時間組の一人だったといえよう。

ともかく、上人みずから「行者」といい、家康でも「過役」と告白しているように、一日六万遍の念仏は、決して生まやましい修行ではなかった。せっかく念仏は道俗貴賤男女の別なく易行であると教えられても、一般の量を唱えるのは、むしろ難行で庶民にとってこれだある。だから、上人も決してこれを他人に強いられはしなかった。「必ずしも数を沙汰するを要するにあらず、ただ常念のためなり（百四十五箇条問答）」と、みずから言われているとおりである。しかし、なんとしても念仏中心の日々であったことは争われないのである。

ハガキでひと言

『私の正月』

鈴木重海

(盛岡市大泉寺住職)

初日を迎えて若水を汲む。

無量寿の若水

仏前に初茶を供える、ひと時に

この年も明るく、正しく、仲よくと

祈らで祈る人々の心から

ほほえましい春が育つれる。

ささやかな元旦の供茶の中にも

水は命の源泉と受けとめた

謙虚な心が流れて居た。

水の性は自ら五徳の力量を発動するという。

生きるたくましさ、一切を生かす雅量の響は、畏敬の念を忘れた現代人の心のすざびに、何かを呼びかける。

新しい年の門出に

無量寿仏の、おしみなき恵みに

合掌して

この年も亦、真の幸を祈り合いたい。

西田親正

(大阪市東淀川区在住
専念寺 檀徒総代)

皆様おめでとうございます。私は初老に入っておりますが、十数年来より晴耕雨読の生活で、これ感謝の毎日を送らせて頂いております。これは全く、元祖法然上人様のお導きと専念寺の代々の和尚様方のご教導の賜ものでございます。

早朝に初氷に身を清め、仏前で先祖様にお礼を申し上げて、町内の神社仏閣にお初穂をお供えするのが例年でございませう。ご参詣の方々とお互いに祝し、過去を語り、旧年を反省し、本年の歩みを共に研究して、過去なき様に共生の努力を約して辞去し、私なりに家内のことはもちろん日本の過去と現在の状況を省み将来の社会を推思して感謝の根源を思索しております。仏教の教化活動の必要性をひしひしと身に感じつつ、元旦を楽しみ、夕陽の美しき遙かなる六甲の落日を眺めるのです。

合掌

阪入達太郎

(東京都日野市在住)

開八第一年の陽春瑞光、おおみいのちの納まる無始、阿弥陀仏の大慈悲の摂引を蒙り心深く感謝合掌いたします。一年の計は元旦にあり——「み仏の道多けれど捨つといふ一筋よりぞ思い入りけむ」、「法の為身を捨つ小舟同じくは、この荒磯に朽ちぬと思ふ」の御聖歌の思いが、心の底から力強く湧き出し、口称念仏正行専修に残年を献げたいと、勃々決心し

ました。ここ五年来脳溢血、狭心症に倒れ、白内障と緑内障にて再度入院、転重軽受幸い快癒、独眼に止り、病を西方浄土の道案内と感謝しております。此度区画整理にて、土地住居も狭小となりましたが、朝課、長香一柱(五十分)の勤行後、この狭い庭に出て、西方に向けて合掌十念、樹間を念仏廻行し、悔いなき唯一向念仏を称えさせて頂きたく、新年の確信を、心腹深く刻銘する次第です。

今井捷一

(奈良市アヤマ池在住)

小生明けて七十一歳、本年も亦歩く(登山——日曜祝日はいつも)、聴く(法話、宗教講座、市民大学……)、読む(宗教関係図書、一般新刊図書……)、書く(自伝、登山のすずめ)ことに懸命の努力を続けたいと張り切っています。大阪市街のメリヤス会社へ奈良から日々通勤、老いを感じず至極元気で健康にめぐまれた日々を楽しく送れることを感謝しています。歩く、聴く、読む、書くのこの四方面に忙しくても楽しい充実した一日一日を今年も送りたい。



法然上人霊場めぐり 第十二回

村上博了

第十三番札所

京都

清浄華院

一

第二十三番札所は、京都市上京区寺町広小路上ル北辺町大
本山清浄華院である。御詠歌は、

雪のうち 仏のみなを 唱うれば

つもれる罪も やがて消えぬる

仮令淡雪の消えない「つかの間」も、お念仏すれば阿弥陀如
来の大光明に摂取され、老若男女誰も必ず往生すると言う、
上人のみ教であり如来の本願であり仏教の本旨である。上人
と当院との関係は、勅修御伝に

高倉院御在位とき、承安五年の春、勅請ありしかば、主
上（天皇）に一乗円戒をさすけたてまつる。卿相頂戴し、

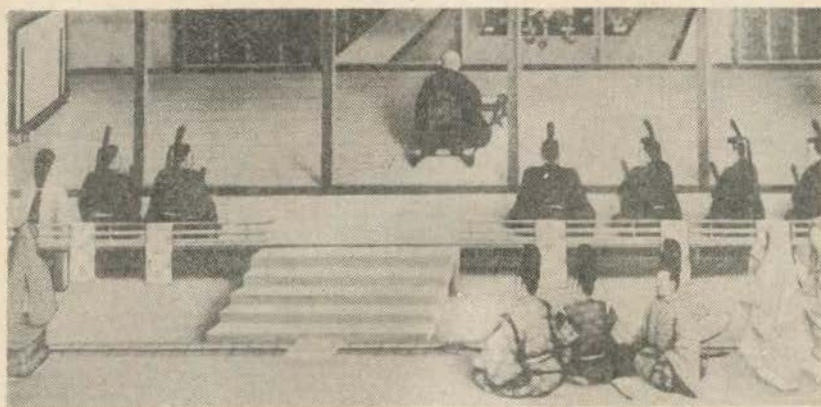
宮人稽首す

と伝うことが発端であった。天皇は、上人の円頓菩薩戒正統
相承の名譽をきこしめされたからである。卿相頂戴と云うこ
とは殿上人や各大臣も受戒したのである。宮人稽首とは宮仕
への人々も首をたれて拝聴という盛儀であった。この春、上
人四十三歳、如来の御本願を有難くうけとどめられ専修念仏
の浄土宗を開立された佳辰である。その説くところは円頓戒
と専修念仏についてであつたろうことは申すまでもない。

天皇大いに感銘、布施として当院を勅授されたのである。

翌年四月八日大地震、二七日後白河法皇は叡山に幸して明雲
座主に受戒、七月八日建春門院逝去、同月十七日六条上皇崩
御、九月十九日九条院崩御と無常迅速の御体験がつづき、益
々はかなさを痛感しまして、上人の専修念仏を深く信仰せ
られ、阿弥陀如来の十二光仏に擬し十二光院を増建、上人を
当院中興上人念仏の元祖と仰がれるに至つた。

二



御所の内仏殿を法然上人におくられた処

〈知恩院所藏〉

高倉天皇が六条天皇について即位されたのは仁安三年（一一六八）である。この時院政を行っていられたのは、後白河上皇であった。天皇即位二年目に上皇は法皇とならせられ、院政の実権はその掌中にあった。上人と法皇との間柄は建久三年二月二十六日、

法皇、上人を御臨終の善知識として召され、御授戒あらせられ、翌三月十二日寅刻、御臨終正念にして、称名相續し、御端座ねぶるがごとくして（六条殿）で、往生の素懷をとげさせ給き、御年六十六なり。誠に宿縁のいたり云々と伝えられる。是より先文治元年（一一八五）春、法皇が上人を勸請し、摂州四天王寺村に草庵を結んで「日想観」を共修以來、この年まで八カ年を経ている。法皇の厚い帰依と信頼さが感得される。法皇の念仏信仰につき、

ひとへに上人の勸化に帰しましたし御信仰他にことなりしかば、百万返の御苦行、二百余カ度まで、功をつみ、比類なき御ことにてぞましたしける

と伝えられ、上人もその厚い御信仰に敬意を表されていた。従って清浄華院は、浄土宗寺院第一号の由緒深い天下の大霊場である。

什宝 智証大師筆泣不動明王。宅間法眼筆同絵巻、上人の星念珠等あり。

京都市電、バス、府立病院前下車

第二十四番札所

京都黒谷

金戒光明寺

第二十四番札所は、京都市左京区黒谷町大本山金戒光明寺である。御詠歌は

池の水 人の心に似たりけり

にこりすむこと 定めなければ

と云う上人のお歌である。

人の心を、池にたとえ、にこりすむこと定めないけれども、人のもつ仏心を素直に育てよき人生、明るい家庭、充実生活を営なましめたいというみ教である。

承安五年春三月、上人浄土宗を開宗せられるや、四明黒谷の報恩蔵（経蔵）を立ち出で、真如堂に参詣、叡空上人からゆずられた当山林中を歩き、現在の紫雲石に腰かけ、西の方を仰ぎ念仏申された所石から紫雲が棚曳くを感じ、正に有縁の聖地として草庵を結ばれた。後に黒谷の堂宇を移建し新黒谷と呼んだのが当霊場である。二世は法蓮房信空であった。

二

上人と信空との関係は、信空が法然上人七七日忌に捧げた諷誦文に

先師（上人）二十五歳の昔、弟子（信空）十二歳の時、かたじけなくも師資の契約を結び、ひさしく五十年序をつめり。一旦生死をへだつ、九廻の腸（はらわた）たえなんとす。北嶺黒谷の草庵に宿せしより、東都白河の禅房にうつりしに至るまで、その間撫育の恩といい、提撕（ていせい）の志といい、報謝の思、昊天きわまりなし云云

と述べていることに明らかなように兄弟親子同ような師弟の間柄であった。信空の父は左大弁行隆のちの「造東大寺大仏殿長官」である。信空の人となりについて叡山毘沙門堂明禅法印は、

このひじりのことをば、内外博通し、知行兼備せり。念仏宗（浄土宗）の先達、傍若無人というべし

と、たたえている。上人と信空については、勅修御伝の十三カ所に出ている。特に上人七十二歳元元元年十一月七日七箇条起請文の起草代筆をしていることは、法然上人のよき相談相手をもつとめた信頼の人格者であった。

信空は安貞二年九月九日、当山で、九条の袈裟をつけ、頭北面西、法然上人の分骨を胸に抱き合掌念仏を唱えつつ一陣の



比叡山を下られた法然上人が庵を結んで念仏された処

〈知恩院所蔵〉

秋風と共に大往生を遂げられたのである、八十三歳であった。

三

念仏元祖浄土宗祖法然上人は、ご入寂日の二日前建暦二年正月二十三日に、当山で、御遺訓一枚起請文をしたためられた。後柏原天皇が「一枚起請文法然上人真筆」と表題の宸書を添いられている有難い霊場である。

後小松天皇は「浄土真宗最初門」と勅額を下された。現在三門に奉掲、諸人の専修念仏結縁の資とし、宗祖法然上人の大慈愛と往生勝因法悦を有難く尊く生き生きと心底にとどめられる。境内に吉田寺の観音堂、宝幢寺名残りの日本三体の(一)文殊像と三重塔もあり、背後の墓地は京の高野山と呼ばれ古今名士の墓も少くない。

什宝、一枚起請文、重文山越阿弥陀三尊、鏡の御影、千手観音、熊谷よろいかけ松等あり。
市電、市バス岡崎道下車が便。

第二十五番札所

京都 東山
浄土宗総本山

知恩院

二十五番札所は京都東山林下町浄土宗総本山知恩院である。法然上人が高倉天皇の承安五年春三月、浄土宗を開宗、四明報恩蔵を降り西山に暫住、改めて東山吉水の聖地に住居せられた。當時は三坊あり、(一)中ノ坊又は二ツ岩禪坊とも云われた、西山広谷の庵室を移された房舎で現在の知恩院御影堂の地に当る。(二)を東ノ新坊又は松下禪坊とも呼ばれ現在の大鐘樓の東北部に当る。(三)を西ノ旧坊又は清水禪坊ともいわれ現三門の西南の地に当る。

上人は中ノ坊に常住せられ、東西二坊は門弟達の住所にあてられた。ここは上人が、弟子門徒達に毎日入念な御指導をした教場、又上人御入寂の聖地であり靈場である。

二世勢観房源智上人は、四条天皇の文暦元年同信と図り、朝廷に奏して吉水大谷の旧地を復し、仏殿堂宇を経営、上人を開山第一世と仰ぎ、華頂山大谷寺知恩院と号した。

天皇嘉稱、勅願所とせられ「華頂山」「知恩院」「大谷寺」と勅額を下されたのである。

二

勅修御伝に

上人一向専修の身となり給ひにしかば、つひに四明の岩洞を出で略　いくほどなくて東山吉水の辺に、しづかなる地ありけるに、かの広谷の庵をわたくし移り住み給ふ。たづ

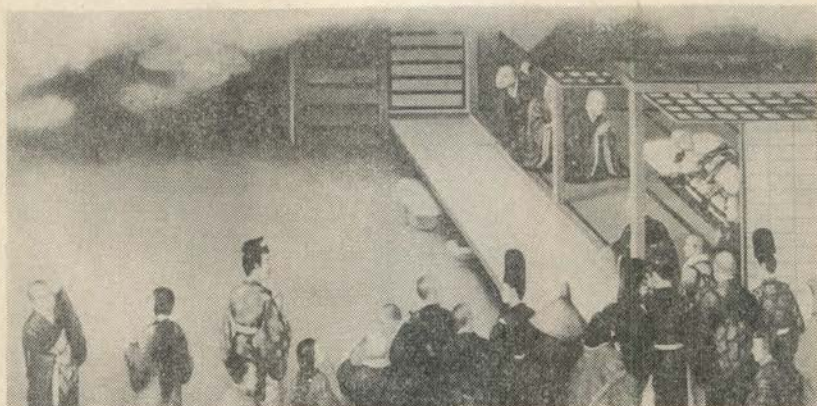
ね到る者あれば、浄土の法を演べ念仏の行を勧めらる、化導日にしたがひて盛りに、念仏に帰するもの雲霞のごとし云云

自然に専修念仏申す人々が雲霞のように多くなつた。

建暦元年十一月二十日、上人は摂州勝尾寺から嵯峨を経て帰洛せられ、青蓮院慈鎮和尚の御世話で、大谷(吉水)の禪房に居住されたのである。上人の入寂について勅修御伝には二十五日の午の刻よりは、念仏の御声やうやくすかにして、高声念仏は時々まじはる、まさしく臨終に、のぞみ給う時、慈覚大師の九条の袈裟をかけ、頭北面西にして、光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨の文を唱へて、眠るが如くして息絶給ひぬ、音声とどまりてのち尚ほ唇舌を動かしかばふこと十余返ばかりなり、面色ことに鮮かに形容笑めるに似たり、建暦二年正月二十五日午の正中なり、春秋八十にみち給ふ

とある。正しく東山吉水知恩院の聖地は、上人専修念仏薫修伝化と臨終の靈地であつた。而も息絶えてからも尚その唇舌を動かされ、又笑めるに似たことは、本当に静かな眠るような安祥とした念仏相続の大往生で、専修念仏の大功德を、諸人は目前に有難く仰いだのである。

現境内七万三千有余坪、東山連峯を背景とした天下第一の



法然上人の吉水の庵室の地であり祖廊のある処

〈知恩院所蔵〉

景観地、大小百六棟の建造物は、緑りの松柏に隣見する大霊場である。

三

御詠歌は

草も木も 枯れたる野辺に ただひとり

松のみ残る 弥陀の本願

という上人の御歌である。草も木も枯れたるとあるは、余乗を指している。念仏以外の教は枯れることがあったとしても、専修念仏は「如来の本願」であるから永遠に人類済度の大光明として残ることを詠んでいる。

什宝 国宝法然上人行状絵図四十八卷

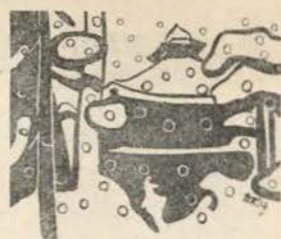
重要文化財 建造物 勢至堂

経蔵、三門、本堂（御影堂）

大方丈附玄関と歩廊、小方丈附歩廊、唐門

そのほか重要文化財 数十点 文化財美術品の一大宝庫である。

年中行事の(一)として、毎歳四月十九日から二十五日まで一七日間「御忌」大法要。信徒信行道場として、三門前に和順会館竣工面積七、五七九・八五二平方米地上二階、宿泊者五百名、華頂山に偉容を添えている。



仏説無量寿經 卷下(五)

村瀬 秀雄

一 第一殺生の惡

一惡者諸天人民蠕動之類欲レ為一衆惡一、
莫レ不二皆然一。強者伏レ弱転相剋賊、段
害殺戮迭相吞噬。不レ知レ修レ善惡逆無
道。後受二殃罰一自然趣向。

一惡とは諸天人民ねん動の類は衆惡をなさんと欲し、皆然らずということなし。強きものは弱きを伏し、うたたあい剋賊し、残害殺戮してたがいにあい吞ぜいす。善を修すること

を知らずして惡逆無道なり。後に殃罰を受けて自然に趣向す。

(意訳)

第一殺生の惡というのは諸天、人民その他一切の生物が、みな多くの惡を作ろうとしてゐることであつて、そうでないものは一つもない。力の強いものは弱いものを屈伏させ、止めどなく互に殺害しあい、或いは傷けたり殺したりして互に吞みあい噬みあつてゐる。善を修めることを全く知らないという惡逆無道のものばかりである。従つて來世では惡の報いとして罰を受け、自然に地獄、餓鬼、畜生の世界におちて苦しみを受ける。

二 第一痛の苦しみ

故有二自然三塗無量英惱^一。転^二賈其身^一、故レ形易^レ道。所^レ受壽命或長或短、魂

神精識自然趣^レ之。当^二独值向相從共

生^一、更相報復無^レ有^二絶已^一。殃惡未^レ

尽不^レ得^二相離^一。展^二転其中^一無^レ有^二出

期^一、難^レ得^二解脱^一痛不^レ可^レ言。天地

之間自然有^レ是、雖^レ不二即時卒暴応至^一

善惡之道会当^レ帰^レ之。是為^二一大惡^一痛

一焼^一勤苦如^レ是、譬如^二大火梵^二焼人身^一。

故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その身を転こし、形を改め、道をかう。受くる所の寿命は或いは長く或いは短く、魂神精識は自然にこれに趣く。まさに独りあたい向い、あい従いて共に生ずべく、更にあい報復して絶えやむことのあることなし。殃惡はいまだ尽きざれば相離るることを得ず。その中に展転して出期のあることなく、解脱を得がたく、痛みはいうべからず。天地の間に自然にこれあり、即時に卒暴に応至せずといえども、善惡の道はかならずまさにこれに帰

すべし。これを一大惡一痛一焼となし、勤苦することかくのごとく、たとえば大火の身を焚焼するがごとし。

(意訳)

このように因果の道理によつて自然に地獄、餓鬼、畜生の世界におち、無量の苦惱をうけることになる。その身は各惡道に移り變つて生れ、姿をかえて惡の世界に往くのである。そこでの壽命は長いこともあり、短いこともあるが、たましいはいつも一緒にゆくのである。これらの世界に独りで生れることもあり、他の者と一緒に生れることもあるが、そこでは再び報復しあつて決して止むことがない。前世での惡業が尽きない限り相手から離れられずに殺し合うことになる。これらの世界の中を転々とめぐり、生死の世界から脱け出せず、従つて解脱を得ることができないのであるから、このような苦痛はこの上もなく辛いものであつて、とうてい言葉ではいい尽せない。天地の間には自然にこうした道理があつて、その報いが今直ちに來るとは限らないが、善惡の業による報いを受けることには變りがない。これを第一の大火、第一の痛、第一の焼といつて、殺生の惡を犯して受ける苦しみはこのようであつて、たとえば大火のために身を焼かれる苦しみのようなものである。

三 第二偷盜の惡

二惡者世間人民父子兄弟室家夫婦都

無二義現二不レ順二法度一、奢姪憐縱各

欲二快意一。任レ心自恣更相欺惑心口各

異言念無レ実。佞諂不忠巧レ言謾媚嫉レ

賢謗レ善陷二入怨枉一。主上不レ明任二用

臣下一、臣下自在機偽多端、踐度能行知二

其形勢一。在レ位不レ正為レ其所レ欺、妄

損二忠良二不レ当二天心一。臣欺二其君一兄

弟夫婦中外知識更相欺誑。各懷二貪欲瞋

恚愚癡一、欲二自厚一己欲二貪多有、導

卑上下心俱同然。破レ家亡レ身不レ顧二前

後一、親屬内外坐レ之而滅。

二惡とは世間の人民父子兄弟室家夫婦のすべてに義理がな

く、法度に順ぜず、奢淫憐縱にしておのおのは快意せんと欲す。心に任せて自ら恣にし、更にあい欺惑し、心口はおのおの異にし、念言に実なし。佞諂不忠にして言を巧みにし、へつらい媚び、賢を嫉み、善をそしり、怨枉におとし入る。主上は明かならずして臣下を任用し、臣下は自在にして機偽多端に、踐度能行してその形勢を知る。位にありて正しからざれば、そのために欺かる所となり、妄りに忠良を損して天心にあたらす。臣はその君を欺き、兄弟夫婦中外の知識は更にあい欺誑す。おのおのは貪欲、瞋恚、愚癡を懷き、自らおのれを厚くせんと欲し、貪りて多くあらんことを欲す。尊卑上下の心はともに同じく然なり。家を破り、身を亡ぼし、前後も顧みず、親屬内外はこれによりて滅す。

(意訳)

第二偷盜の惡とは世間の人々、親子兄弟、夫婦家族のすべてのものの間に相互の義理がなく、法規に順することがなく、おごり高ぶり、財物を貪り、放逸にながれ、そしてこれらのことを愉快なことであると思っている。人々は思うがままに勝手な振舞いをなし、しかも相互に欺まし惑わしあい、心と口とはそれぞれに異り、考えにも言葉にも真実さを欠いている。他人にはおもねって真心をつくすことがなく、言葉巧みにへつらい、媚びを呈し、それでいて賢い者を嫉み、善人を

そして怨んで邪道におとし入れようとする。もし愚かな君主が十分に調べずに臣下を任用すると臣下は自由に振舞い、多くの偽りごとをするようになり、不実をかまえて実行し、己れの利益だけをよく弁えるようになる。君主の位にありながら正しく任務を施行しなければ、そのために臣下から欺かれることになり、反って忠良の臣下を失うことになるのである。天帝の心がけに相当しないものとなる。臣下は己が君主を欺き、兄弟、夫婦、親戚、友人も同じく互に欺き、たぶらかすことになる。各人はみな貪りと怒りと愚かさを持っていて、己れの利益が多くなることだけを考え、少しでも多くの利潤を得ようと貪り求める。このことは身分の尊卑や上下に關係なく、みな同じことを欲している。こうして家庭を破壊し、身を亡ぼし、前後を顧みることなしに内戚外戚の親戚たちはそのために滅びてしまうのである。

四 第二惡の苦しみ

独来独去無二一隨者一、善惡禍福追_レ命所生。或在二樂處一或入二苦毒一、然後乃悔當二復何及一。世間人民心愚少_レ智見_レ善

憎謗不_レ思慕及一。但欲_レ為_レ惡妄作二非法一常懷二盜心一怖二望他利一。消散靡尽而復求索、邪心不_レ正懼二人有_レ色、不三予思計一事至乃悔。今世現有二王法牢獄一隨_レ罪趣向受三其殃罰一。因下其前世不_レ信二道德一不上_レ修二善本一今復為_レ惡。天神剋識別二其名籍一、壽終神逝下二入惡道一。故有二自然三塗無量苦惱一、展二轉其中二世世累劫無_レ有二出期一、難_レ得二解脫一痛不_レ可_レ言。是為三二大惡二痛一。燒一勤苦如_レ是、譬如三大火焚二燒人身一。

独り来り独り去って一も隨うものなく、善惡禍福は命を追うて生ずるところなり。あるいは樂處にあり、あるいは苦毒に入り、然る後にすなわち悔ゆとも、まさにまた何んぞ及ぶべき。世間の人民の心は愚にして智が少なく、善を見ては憎謗し、慕い及ばんことを思わず。ただ惡をなさんと欲し、み

だりに非法をなし、常に盗心を懷いて他の利をき望す。消散し、み尽してまた求索し、邪心は正しからずして人の色のあらんことをおそれ、あらかじめ思い計らずして事に至りてすなわち悔ゆ。今世に現に王法の牢獄があり、罪に随つて趣向し、その殃罰をうく。その前世に道徳を信ぜず、善本を修せざるによりて今また惡をなす。天神は剋識してその名籍をわかち、寿が終り、たましいは逝きて惡道に下り入る。故に自然に三塗の無量の苦惱があり、その中に展転して世々累劫に出期のあることなく、解脱を得がたく、痛みはいふべからず。これを二大惡二痛二燒となし、勤苦はかくのごとく、たとえば大火の人身を焚燒するがごとし。

(意識)

人はこの世にただ独りで生れ、この世を去るのもただ独りであつて、なに一つわが身に付き添つてゆくものはない。善因善果、惡因惡果の広報によつて禍福を得るのは、その人に從つて生ずるものである。あるものは極樂淨土に生れ、あるものは地獄におちるか、おちた後になつて後悔しても何んの役にもたない。世間の人々の心は愚かであつて智慧が足りないから、善人をみては憎み誹謗し、善人を慕つてこれに從うことをしない。ただ惡事ばかりすることを欲して、無暗やたらに非法を犯し、常に盗心を懷いて他人の利益をうら

やみ、自分のものにしたいと願っている。また自分で持つてゐる財産を徒らに使つて失ひ、使い果して財産が尽きると再びさがし求めようとする。しかし心に邪心があるために他人の顔色ばかりを恐れて伺ひ、予め思いめぐらして考へておかないから、ことが起つてから後で後悔するのである。この世には王法で定められた牢獄があり、罪の輕重に応じた罰を受けてゐる。人は前世において佛法を信じないで善根功徳を積む修行をしなかつたために、この世においてもまた惡事を行つてゐるのである。天地の神々は人々の罪をすべて細かく記録し、名簿をつくつてゐるから壽命が終ると、その人は報いに應じてそれぞれ地獄、餓鬼、畜生の世界におちてゆくことになる。このようにして地獄、餓鬼、畜生の世界には自然におちてゆき、そこで無量の苦惱をうけながら、これらの世界を転々とめぐり、実に長い間にわたつて生死の世界から脱け出せず、從つて解脱を得ることができないのであるから、このような苦痛はこの上もなく辛いものであつて、とうてい言葉ではいい尽せない。これを第二の惡、第二の痛、第二の燒といつて、偷盜の惡を犯して受ける苦しみはこのようであつて、たとえば大火のために身を燒かれる苦しみのようなものである。

念佛ひじり三國志

(九)



—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



こうして虐殺されてゆく父の仇を、絶対に討ってはないか。

と、法然は瀕死の父親自身の口からいましめられたという。

法然の父漆間時国は武人であった。面子（めんつ）とか節義を人生の指標にする階級ではないか。

この理屈は判らぬ。
と、主張するのが話の座へ加わってきた西光法師だった。

姉小路の旧信西邸の書院で、夜は更けていった。燈芯の灯はか細くなりかけたが、法然、円照、西光鼎座した男たちの言葉には熱気がこもった。

とりわけ法然は諄々と西光法師を説こうとする。

「……仇討は悪い因果をつくります。私が父の仇を討ったとする。討った定明の遺児が、また私をねらう。これ

ではいつになっても人間に和合は訪れません。悪因果がつみかさねられてゆくだけです」

「しかし花山院の姫君を殺した悪法師には子孫も眷族もない。誰が悪因果をつないでゆくのだろう」

すでに西光は、悪法師義信房への復讐、私刑を決意しているようであった。

「形にあらわれた子孫、眷族は、たしかにいません。しかし西光どの、心が伝えられてゆく。人間の心が」

「人間の心じゃと——」

「殺伐で憎悪に満ちた心です。伝えられてゆく心は、人間社会に道理を作ります。悪をなした者が悪の酬いを受けるのは当然だ、という道理です」

「それが人倫というもののだ」

「いいえ。これが道理としてまかり通るあいだ、人間は救われません。どこかで断ち切らなければなりません。私の父は、臨終の床で、それを断ち切ろうとしたのです」

遊蓮房円照には、法然の主張がよく理解できた。その理解は、同時に彼の心へなごやかなものをもたらした。八ツ裂きにしても足りない義信房だが、彼もまた救われねばならない人間ではないか。

あらすじ

芳醇な猿酒を提供した老舗の下で無惨な最期を遂げた貴子の死体を発見した円照は途方にくれるだけであった。たまたま訪れた検非違使あがりの西光は、円照から父の遺品唐三彩の壺が紛失していることを聞き、それを手がかりに犯人を捕えたと約束した。十数日後その壺は太福長者邦綱のもとにあると連絡があり、確認のためその邸を訪れた。仏殿本殿本尊のかたわらに置れた壺はまさしく唐三彩であったが、円照がより驚いたのはそこに法然房源空が端座していることであった。その夜招きにより西光の邸に行った法然は、涙ながらに貴子の最期を語り、その仇荒法師義信房に触れた円照に、父漆間時国公非業の最期を例に出し、仇を打つべきでないと言りはじめた。

愛する貴子への思慕を、復讐という行為で満たすことは、法然がかねがね口に出している「自証」になるのである。自力で、その結果を確証しようとする空しい行動だ。

「ともかくその下手人、義信房とやらを罰するのは、おやめなさい」

「罰もないで何をする?」

西光はまだ屈服していない様子である。

「円照どの」

＜火焰の車＞



と法然は、向きなおった。

「円照どのは、そのひじりを説くのです。念仏の功徳を教えてやるのです。恩讐のくり返しは、あたかも火焰を噴き出した車が急坂を駆け降りてゆくようなものです。

とどまるところを知りません。一人でも、一カ所でも、この悪しき因縁に歯止めを加えなければなりません」

「一人でも、一カ所でも」

「私の父がそうでした。父の家系を支えてきた官人の血、武士の肉は單純に恩に酬い、敵に復讐を加えてきたのです。父の代に至って、この悪しき因縁に歯止めをしたんです。私は出家したのです」

「私にしてもそうだった。何者かがたくらんで父の信西入道を死へ追いやった。その何者かへの復讐をやめて、私も、ほかの兄弟たちも出家した」

「それを今、愛人が殺されたからと言って」

「わかりました、法然どの」

円照はうるんだ瞳で、この心の師を見上げている。

この合意を、西光法師はせせら笑うのだった。

「一人の力や、一カ所ぐらいで歯止めをしたって、それが何になろうか。御坊の言う火焰の車は、さらに高々と炎を噴きあげて暴走してゆくのですぞ」

「結果だけを見て、ものを言っではなりません。大小の比較で、ものを考へてはなりません。どんなに小さくとも悪しき炎の一つを消すことです。それも、おのれの力ではない。小さい部分でも消し止め得たことは阿弥陀仏のお慈悲なんです。いつかは必ず阿弥陀仏が、すべての炎を消し去って下さる、と信ずることです」

「そういうお方が、この世に実在するとしての話のう」

「実在することを信ずるのです」

西光法師は無作法にも両手を長々と虚空に突っ張らせ、欠伸をすることで法然の説得にこたえた。

「夜も更けた。おのおのやすもうではないか」

のっそりと立ち上がった。部屋を出ていった。

「円照どの、近いうちに私は黒谷を離れます」

「おう、来て頂きますか」

「師の釈空上人ともゆっくりお話をしました。理解してもらいました」

「いつごろ西山へ」

「年が明けたら、そうそうにということになりましよう」

承安四年があと二カ月足らずで暮れる。

遊蓮房円照の胸はずんだ。じきにこの法然房と一緒に念仏生活へはいることができるのだ。

「私が西山へゆくまでの間に円照殿。一つお願いがあります」

「何でしょうか」

「その義信房とやら言う悪法師のことです。彼を念仏者に仕立てておいて下さい」

「義信房を念仏者に——」

悪法師の罪を許すだけではなかった。進んで彼を念仏者にせよ、と法然は命じてくるのである。

「心悪しき者。それだけに義信房は強固な念仏者になれるはずです」

「私のような者に、それができるかどうか」

「できます。必ずできます。阿弥陀仏の深いお慈悲を信じさえすれば」

つらぬくような法然の視線が円照にそそがれている。

法然自身が信じこんでいないで、どうしてこの強烈な眼光が発せられるだろうか。

日のあるうちに西山広谷へ戻ろう、と遊蓮房円照は考
えていた。ところが午後になると、紀伊ノ二位朝子が院
の御所から退出してきた。

父信西入道の、最後の妻となった人である。後白河法
皇が未だ四ノ宮と呼ばれたころの乳母で、この幼君が帝
位に就く夢に、すべてを賭けた。信西と結びついたのも
その賭けに勝ったためだった。

勝った。

だが、じきに信西は滅んだ。紀伊ノ二位は再び後白河
法皇のもとへ戻った。院に仕えて、昔さながらに法皇の
身辺で面倒を見ているのだ。

「信濃どの。院がそなたのお顔を見たいとおっしゃって
いられます」

退出したのではなかった。姉小路の屋敷に信濃守是憲
——現在の円照が在宅していることを知った後白河法皇
の希望を伝えるためである。

「二位どの、それは……」

円照は迷った。世捨て人の自分がいまさら法皇に拝謁
したとて何になるう。

「院は仏法にことのほか深い関心をお持ちでいらつしや
います。現在の信濃どのが、どんな形で仏道に励んでい

るのか、院はそれが知りたいとのご希望です」

ことわる理由が見出せなかった。

それと、法然から強い示唆を与えられた自分の専修念
仏を、法皇に伝えるのも無益なことではないかも知れな
い。

「わかりました。伺候致します」

盲目の琵琶法師生仏も同行することになった。

「法眼寺の静憲法師がよく院へお見えになりますよ」

ゆく道すがら、紀伊ノ二位は告げた。

静憲は三井寺にいる澄憲の同母兄で、円照には弟にあ
たっている。父信西ゆずりの才人で、政治感覚もシャ
ブだった。法眼寺の執行をつとめている。

「たしか静憲は平相国（清盛）の信任も厚いと聞いてい
ました」

「あの御坊が仲を取り持っているからこそ、院と平相国
の間が保たれているのですよ」

「院はそれほどに清盛公を嫌っておいでなのですか」

「嫌うなどという段ではございませぬ」

そうであろう。あの西光法師みたいな過激な反清盛党
がたえず身辺にあって、憎悪を吹きこんでいるのだ。そ
れでなくとも後白河法皇のご性格は、良く言えば天真爛

漫な芸術家氣質だ。悪く言えば移り気で、その上自己主張がきつ、狷介孤独であつた。平清盛の権力独走を許すはずがなかった。

後白河法皇は、なつかしげに僧形の円照を見やった。

「信濃は頭頂こそ丸めたが、眼は昔に変わらぬ輝きを持っておる」

「眼が、ですか」

「父ゆずりの鋭さじゃ」

衰めようとしているのか、警戒しているのか、円照には判断がつかなかった。

「この是憲どのは、信西のあまた多い子息の第一等の頭脳と見識をお持ちでした」

紀伊ノ二位が言葉を添える。

「うむ。その頭脳見識は全く衰えておらぬとみえる。信濃、平相国の政道をどう考えるかな」

まるで政治感覚のテストをしているみたいである。

「いや今日、伺ったのはそんなお話をするためではございません。仏法について……」

「仏法などどうでもよいわ。今日来てもらった理由は、深い因縁話があるからじゃ」

「何の話でござりましょう」

「信濃、その昔そちには妻がおったな」

「いやまだ祝言するまでには至りませなんだ」

「平相国清盛の四女だ」

「はい」

「桶口小路の仮住居へ夜ごと忍んだであろうが」

遠い話である。

その佑子は妙なる琴を弾じた。円照が桶口小路へはいつてゆくと、待ち兼ねたように、誘いこむように、琴の響きが流れてきた。

一刻も早く祝言を、と父の清盛はわざわざ佑子に仮住居を与えて、円照に忍んで来させるように仕向けたのである。現在で言う婚前交渉をさせて、既成事実を積み上げようとする政略であつた。

それほどに清盛は、この結婚を急いでいた。無理もない。円照は当時、ライバル源義朝から昇養子にときつく望まれていた若き公達だったのである。

しかし平治の兵乱は、一朝にして信西入道一族からすべてを奪つた。円照が父の獄門首を見たその脚を桶口小路へ向けたとき、すでにそこは藻抜けの殻であつた。琴のすさびるぞ望み得べくもなかった。

そんな遠い話が、今法皇の口からむしかえされようと

する。

「その佑子がじゃな、冷泉大納言隆房の北ノ方となっておる」

「はあ……」

「ここにおる大納言の甥にあたる」

と、法皇はかたわらに控える公卿を指さした。

大納言成親——

その娘が今をときめく平清盛の長子重盛の御台所であるぐらいの知識は、円照にもあった。

「その隆房卿が、近ごろ熱烈な恋をしています」

法皇にかわって大納言成親が説明しはじめ。

相手は宮中に仕える小督という美女である。十八歳。

この女性もまた円照とは無縁ではなかった。

円照の実兄で信西入道の長男に成範がいた。この成範は吉野山の桜に憧れ、自分の邸内を桜樹で埋めつくした。桜町中納言と呼ばれた。彼は清盛の長女を妻に迎えた。その間に出来たのが小督である。

なぜ法皇や成親が自分の姪にあたる小督の話をはじめたのか、円照はやがてその意図をさとした。

平家の血は呪われている。その呪いも死んだ信西入道が崇っている。

と、後白河法皇も大納言成親も盲信する。つまり直接の血はつながっていないが、冷泉大納言隆房と小督は叔父と姪の關係だ。叔母の平氏佑子を裏切って隆房と結合した小督の血には、平氏への呪いが色濃くしみついていくというのである。

「そればかりではない」

と、大納言成親は話を続けた。

小督の呪いの血は、恋に悶える叔父の隆房を冷めたく

捨てて、最近新しい愛人をとらえた。

「それが誰だろう。高倉帝なのです」

「しかし帝には平氏の娘が」

「そこなんです」

「高倉帝はまだ御年十四か五歳」

「さよう、十四歳におわします。この年齢（としわ）も

ゆかぬ帝を小督が誘惑したのです」

「誘惑したのですか」

「帝も年に似合わず早熟で……中宮徳子とも立派に御成

婚とか」

宮廷——この貴族社会での情事の乱れは、今にはじまったことではない。帝も公卿も美女を追いかける眼しか持ち合せていないのである。

この時点で、円照は知る由もなかったが、やがて小督は平清盛によって追放されてしまう。そうだろう。おのれの聲二人を奪取った魔女なのだ。

平氏への呪い……小督の艶話を餌に、紀伊ノ二位や西光法師が後白河法皇とその取り巻きへ精力的に吹きこんでいることもまた、円照には十分に推察できた。

「いまお話が出た小督ノ局の母親。桜町中納言の西ノ方はその後どうなされたのかな」

ふと思いついて、円照は成親大納言に訊いてみた。

桜町中納言成範もまた、平治の兵乱で位階を剝奪されて、八島へ流島されてしまったのである。西ノ方である清盛の長女が六波羅屋敷へ帰ったところまでの消息は、円照も風の便りに聞いていたのである。

「ご存じなかったのか、信濃守どの。あの西ノ方は……」

三

遊蓮房円照は西山広谷への帰路を、ひとりたどった。

久方ぶりで都の匂いを嗅いだ。

やはり、すえた匂いであった。

あの法然が言う悪して因縁でがんじがらめに縛られた

世界であった。

系図と邪恋、そこへ政治権力の陰謀が、粘ばっこいニガリのようにこびりついていて。

それにしても衝撃は、自分の実兄桜町中納言成範の未亡人の消息だった。この清盛の長女は、平治の兵乱で失脚した夫を捨てて花山院左大臣と再婚している。

花山院左大臣兼雅こそは、義信房に殺された愛人貴子の実兄ではないか。

一度は義姉と呼んだあの西ノ方は、貴子の義姉でもあったのである。

同じようにその上流社会を捨てて、西山の涯てに通世した自分と貴子は結ばれた。純粹な信仰で結ばれて。

しかもこの通世の世界にも呪いは渦巻いていた。貴子は自力ひじりの義信房に惨殺されてしまった。

仏の世界は完全に消滅したのであろうか。それだからこそ法然は、末法末世と呼んで、阿弥陀仏の救いだけを求めている。

それに気づかぬ後白河法皇とその側近者たち。

呪いがかった清盛平家を打倒するのは今だ、と氣勢をあげていた。

愛娘を平重盛の奥方になっている大納言成親までが騒ぎ

まくるのは、いったいどうしたことだろう。

何やら同じ桶の水の中で、同じ形をした魚どもが喰い合っている地獄図ではないか。

法皇はまだ円照の頭悩と感覚を買っている。清盛打倒の大業達成のためには是非円照が必要だと力説した。

「静憲法印がいるではございませぬか」

円照の反論に、

「法眼寺執行は、余りにも平相国と深くなりすぎています」と、法皇はしりぞけた。

無下に拒絶することは危険を意味した。なぜなら重大な陰謀を知った人間を、安易に生かしておく道理がないからである。それが陰謀者の体質だ。

円照は、しばしの熟慮をお願いして、院を辞したのであった。

もちろんそんな陰謀に加担する意志は、さらさらなかった。平家にも清盛にも特殊な感情をいだいていない円照だった。まして信西一族の呪いなど。いや呪いの存在自体を円照は否定しているのである。

そんなことよりも、と円照は新しい勇気を胸で盛り上げた。

悪法師義信房を念仏者に改悛させることだ。

この悪法師を救うことによって、自分も亡き花山院貴子も救われるのである。

西山へ登ってゆく円照の足に力が加わった。

広谷へゆく前に義信房の庵室を訪れることにした。谷の瀬を渡り、柚道を登りはじめたとき、円照は常緑樹の葉波に立ちのぼる白煙を見た。不吉な予感で足がすくんでしまった。

しかし、すぐに走り出した。

義信房の庵室はすでに跡方もなかった。白煙はその棟木が燃えくすぶっているのであった。

「義信房！」

呼んでみたが、返事はなかった。

いち早く事態の危険を感じて、悪法師は逃亡したのであろうか。

それも希望的観測というものだった。

庵室の裏側にひろがる雑木林。円照はその一本の幹に寄りかかっていた義信房の姿を見た。

全裸に剝がれて縛りつけられている。頸と言わず、腕胸と言わず、おびただしい太釘が打ちこまれている。

がっくりとうなだれた義信房の両眼はくり抜かれ、これが人間のものかといぶかられるほどに、長い舌が垂れ

〈不吉な白煙〉



さがっていた。

何者かの手で処刑されたのであった。

処刑者は誰か。

円照が予測した人物が、広谷の庵房にいた。数人の手下と持参した瓢（ふくべ）の酒を汲みかわしていた。

「信濃どの。あの悪法師は」

「すでに見た」

「天人ともに許しがたき奴。先夜そなたや法然房のお言葉はあったが、この西光、何としても腹がおさまらなんだ。よって天誅を下したところだ」

西光法師は傲然と言った。

天誅とは何か。

いったい誰に天の意志を代行する権能があるというのか。

円照は断腸の思いだった。

「愚か者！」

「わしがか——」

西光は一寸色をなして円照をにらみかえした。

「みんながじゃ。悪法師もふくめて、すべてが愚か者だと申しておる」

「そうよのう。たしかにみんな愚か者じゃ」

西光は納得して、瓢を傾けて酒を飲み干した。

西山の日没は、里よりも半刻余り早かった。

すでに西光法師たちは都へ引揚げていった。

法然や円照の意志にそむいて執行された惨忍な私刑。

わずかな妥協は、幹から義信房の死体をおろし、雑木林の土中へ埋めたことだけである。

これとても当初はこぼんだ。

「さらされて、山鳥のクチバシで突つきちらされるのがこの法師にはふさわしい死にざまよ」

と言いつのるのである。

やっと諦らめて、配下に埋葬を命じた。

その新しい塚の前で、さっきまで円照は悪法師の菩提を弔う読経をしていたのである。

すでに夕陽を呑みこんだ西山をふり仰いで、遊蓮房円照はさまざまな人間の運命に思いふけた。

非業な死をとげた父の信西入道。花山院貴子。そして悪法師の義信房。

いや生きているすべての人間として、明日にはどんな運命が待っているのか。

平相国清盛を打倒しようと陰謀をたくらむ法皇側近の公卿たち。過激な西光法師の命数として先が見えていると

は言えないだろうか。院の法皇とて、わかったものではなかった。

こんな地獄圖に救いの糸を垂れる人は、あの法然房以外にはない、と円照は信じた。

俄かに寒気を背筋に感じると激しく咳こんだ。全身が炎で包まれたようである。

また発熱したな。

それでも円照は屋内へはいろうとはしなかった。いましばらく、黄昏の残光が映し出す空を眺めていたのがある。

最近めつきり風邪にかかり易くなった自分の身体だった。

この残光の空が見治めのような気がしてならない。せめて発熱に耐えて、完全な闇が到来するまで眺めていたのである。

それはあたかも短く、はかなく消えた花山院貴子の楽しかった日月への追憶に似ていた。

世を捨てたお互いは、短い残光のなかで最後の人生を楽しんだ結果となったようである。

(つづく)

年 新 賀 謹

千一七〇

東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大 正 大 学

電話(〇三三)九一八七三二一(代表)

千六〇三

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛 教 大 学

電話(〇七五)四九一—二四一(代表)

上宮学園長

小 林 大 蔵

京都家政学園長

鵜 飼 光 順

東山学園長

藤 原 弘 道

淑徳高等学校長

里 見 達 人

熊本市九品寺三一—一

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上 田 祐 規

戸 川 靈 俊

京都市左京区黒谷町 西住院

東京都渋谷区幡ヶ谷二—三六一—
清 岸 寺

原 口 徳 正

白 幡 憲 佑

横浜市南区庚台久保山

中 島 真 哉

梅 窓 院

東京都港区南青山二—二六—三八

函館 称名寺住職

須 藤 隆 仙

年 新 賀 謹

神奈川県仏教会副会長

柴田敏夫

横浜市港北区菊名町 蓮勝寺

稲葉好人

〒051 室蘭市沢町十の七

満岡寺住職

北海道第一教区教区長

奈良大道

電話(〇一四三)二一四六七七

〒051 室蘭市大沢町二一一十

善行寺住職

北海道教区第一教区参事

飯島英徳

電話(〇一四三)四四一二六九五

教安寺

野呂幸進

北川一有

長寿院

東京都台東区鳥越二一十三一十八

晴雲寺

塚田弘導

平塚市立野町六

近龍寺住職

松濤弘道

栃木市万町二二一四

電話(〇二八二)二一〇八〇二番

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年十二月二十五日印刷
昭和五十年一月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

一 条 智 光

長野市 善光寺大本願

112 東京都文京区小石川三十四十六
伝通院住職

大 河 内 隆 弘

電話東京八一四一三七〇一番

浄土宗宗務庁

法然上人御誕生地

大仏殿 高德院

浄土宗宗務支所

誕生 寺

岡山県久米郡久米南町

佐 藤 密 雄

大 野 法 道

稲 岡 覚 順

祐 天 寺

大本山 増 上 寺

川口市西川口 西福寺

東京都目黒区中目黒五十二四一五三

巖 谷 勝 雄

鎌倉市材木座

大本山 光明寺

法 主 石 井 真 峯

執事長 吉 川 哲 雄
興隆会長 犬 飼 覚 信

栗 本 俊 道

宝 台 院

野 上 達 雄

〒四二〇

静岡市常盤町二丁目